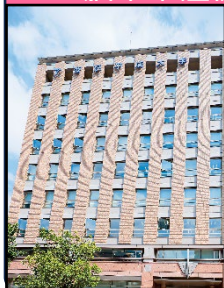


認知予備力に関する研究

～脳卒中症例の機能改善と認知予備力の関連に関する研究～



【池袋キャンパス】健康メディカル学部 言語聴覚学科 講師

原田 円 Harada Madoka

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)



キーワード：認知予備力・余暇活動・脳卒中・機能改善・リハビリテーション

研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

令和4年の「国民生活基礎調査」の調査によると、要介護の原因の第2位は脳卒中（19.0%）です。脳卒中発症後に行う日常生活動作（ADL）の自立などを目的とした集中的なリハビリテーションは、機能障害の改善に有用とされ、これまでに、**脳卒中後の機能改善や予後予測に関わる要因**として、年齢や性別などの**人口統計学的要因**、疾患の種類（梗塞／出血）、脳卒中の重症度、発症から入院までの日数、入院時のADL得点などの**臨床的要因**が検討されてきました。

しかし、言語聴覚士として脳卒中後のリハビリテーションに従事する中で、**人口統計学的要因や臨床的要因が同等でも、機能改善の軌跡は同様ではない**症例も多く経験しました。そして、これまでに検討されてきた要因の他に、機能改善と関連する要因があるのではないかと考えるようになりました。

「**認知予備力**」とは脳の病理と実際の認知機能の水準が必ずしも一致しないことを説明する仮説として提唱された概念で、脳の病理や加齢の影響を受けても**認知機能の低下を抑える個人の潜在的な能力**を指します。**教育歴や職業歴、様々な余暇活動の経験の蓄積**が認知予備力を形成すると考えられています。加齢や認知症との関連について多く研究されており、アルツハイマー病症例を対象とした研究では、認知予備力が高いほど認知機能の低下が抑制されるという研究結果が得られています。

脳卒中症例を対象とした研究は少数ですが、海外では研究数が増えており、認知予備力が高いほど認知機能障害に改善がみられるという報告も出てきています。

本研究では、脳卒中発症後の機能改善には、これまでの研究で報告されている、年齢や脳卒中の重症度などだけでなく、過去の経験の蓄積（認知予備力）も影響するという仮説を立てて研究を行います。

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

機能改善と認知予備力との関連が示されれば、回復期リハビリテーションにおける予後予測の精度が向上し、入院患者様に**①予後を見据えたより良いリハビリテーションを提供できる**ようになると考えています。また、認知予備力を構成する要素のうち、どの要因（教育／職業／余暇活動）が機能改善と関連しているかを詳細に検討し、**②脳卒中発症後の機能改善を促進するような要因が解明できれば、予防医療研究にも貢献できる可能性がある**と考えています。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

【所属学会】日本高次脳機能障害学会

日本高次脳機能学会の2026年度学術研究助成を受け、認知予備力と認知機能の改善の関連について研究を進めています。